

鹿大ジャーナル

鹿大広報

鹿児島大学が発信する最先端情報マガジン

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/>

08 潜入ルポ ~学びの部屋~

**鹿児島県の畜産・農業を知り、
地域を考えるきっかけに**
共同獣医学部 高瀬 公三 教授

10 先輩からのメッセージ

OG: 医学部保健学科作業療法学専攻
助教/作業療法士 池田 由里子 さん
OB: 防衛省陸上自衛隊 自衛隊福岡病院
1等陸尉 歯科医官 山下 浩司 さん

12 研究室からSCHOLAR INTERVIEW

**西南暖地における次世代型
酪農システムの構築を目指して**
共同獣医学部獣医学科 安藤 貴朗 准教授
地魚を食べて、地元の海を守ろう!
水産学部水産学科 大富 潤 教授

16 鹿大トピックス

**全学必修科目
「大学と地域」スタート** ほか

19 進め! 鹿大生

**政治は「生きる当たり前」を
作り出しているもの**
法文学部経済情報学科4年生 伊達 涼太 さん

さっつんが行く!
鹿児島大学総合研究博物館常設展示室



特集

地域医療に貢献する 鹿児島大学病院の使命



鹿児島大学病院の使命

県内唯一の特定機能病院として日々研鑽する
～地域医療における「最後の砦」～

鹿児島大学病院病院長 教授 **熊本 一郎**



2003年10月、鹿児島大学医学部附属病院と歯学部附属病院を統合、現在の鹿児島大学医学部・歯学部附属病院が誕生しました。建物の老朽化に伴い、患者さん、職員のアメニティ改善と構造強化の必要性に迫られ、現在、大規模な再開発整備事業を進行中です。

鹿児島大学病院は、高度な先進医療を提供する「地域医療の最後の砦」と言えます。県内唯一の特定機能病院として、都道府県がん診療拠点病院やエイズ中核拠点病院、肝炎患診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター等に指定されており、2016年には第一種感染症指定医療機関の指定も受けました。一方、近年では、地域医療との連携を強化し、地域の医療水準向上と人材育成に対する取り組みを、さまざま

まな分野において進めています。

本学に求められる立ち位置は「グローバル」という言葉に集約されると私は考えています。かつて本学の学長を務められた井形昭弘先生（現名古屋学芸大学学長）が謳われた造語ですが、研究の分野においても診療、教育の分野においても、地域にこだわって突き詰めていくと、それは世界に通用するものになるということです。また同時に、鹿児島から世界へ積極的に情報発信していくことも我々の責務です。

これからも「医療人の育成および医学・歯学の研究の充実と発展に貢献すると共に、常に患者さん本位の原点に立った、質の高い医療を提供します」という理念のもと、全職員で地域医療の向上と人材教育に精進してまいります。

特集

地域医療に貢献する

21世紀に輝くヒューマン・トータルケア病院へ向けて
～鹿児島大学病院再開発整備事業～

鹿児島大学病院再開発室長 特任講師 **又木 雄弘**

全建造物が免震構造であり、日本列島どこでも大地震が起こりうる可能性を考えると、安心・安全な医療エリアを提供できると考えています。患者さんを最優先しながらの現地改修という大変な面もありますが、効率性・機能性を重視し、各部署と綿密な計画を練って実行してい

鹿児島大学病院は、1974年、城山の私学校跡地からこの桜ヶ丘地区に移転しましたが、築後約40年経って老朽化し、患者さんのニーズも変わってまいりました。近年求められる耐震強度を上げる必要もあり、2007年から大掛かりな再開発に着手しました。4階建ての新中央診療棟完成に次いでヘリポートを有する8階建てのC棟が完成し、現在、地下1階、地上9階建てのB棟を建築中です。最終的な完成予定が2023年ですので、全工程が20年弱という長期にわたる再開発ですが、より良い病院づくりに向けて邁進しています。

ます。

特徴の一つとして、C棟最上階に研修医のための総合臨床研修センターを設置。内視鏡、エコー、腹腔鏡手術やICUシミュレーション室などのトレーニングシステムを整備し、大学病院としての教育機能を充実させました。大学病院特有の質の高い医療、地域中核病院としての機能強化、医歯学統合による高度先進医療・研究を支える機能を保持した病院をめざしています。



鹿児島大学病院完成予想図



特定看護師

福元 幸志 さん



救命救急センター 副センター長

有嶋 拓郎 特任講師



救命救急センター センター長

垣花 泰之 教授

救命救急センターの活動について

〜いのちを守る地域の砦としての教育と救命活動〜

教育を通じて目指す地域医療支援

有嶋 昨年度まで、富山大学で地域支援医療学講座を担当していました。富山でも、医学部卒業後も地元に残ってもらえるよう、教育の充実には力を入れていました。医学生や研修医、看護師には、とりわけ救急の初療について教えてほしいというニーズがあります。そのような声に応える上でも、大学病院においては救急医療に関する教育を充実する必要があると。私は富山県で看護師教育も担当していたのですが、そこで「チャレンジジナース」という救急の初療を柱にしたカリキュラムを作り、現場へ出向いて実践的な講義を行っていました。富山から奄美（鹿児島県）などの離島へも出向いていたのですが、

たとえば東京、大阪でセミナーを開いて島の看護師さん2〜3人を派遣してもらおうより、私がひとり行って20人、30人を教えた方がいい。経費も抑えられるし、現場の機器を使って教えた方がいいですよ。これも地域医療支援です。看護師を獲

得することは医師の働き場が増えることにもつながり、働く場所があれば研修医も地元に残ります。ですので、鹿児島でもこのような取り組みを進めていく予定です。

ただ、チャレンジジナースなどの研修に参加した人が知識や技能を勤務先の病院に持ち帰ってくれることを期待していたのですが、富山県の場合、理想的な形にならなかった気がしています。現場では業務もあり、忙しいからだと思います。

垣花 先輩が先輩に教えることを「屋根瓦方式」と呼んでいるのですが、研修に参加した人が、その学びを現場のみんなに教えることができます。全体のレベルアップにつながると思います。そんな場を私たちが設定してあげることも必要なのかも



チャレンジジナースの様子

しません。

福元 看護部では地域の看護師の質向上も目的とした公開講座を毎年5〜6回実施しています。また院内の看護師に対して、私や救急、集中ケアの認定看護師等で年間60〜70回くらい短い勉強会を開催しています。

有嶋 それが屋根瓦方式ということですね。

いのちを守る環境づくりへの取り組み

垣花 研修医に選ばれる病院であるためにはカンファレンスも大事です。検査結果から治療方針を決めるために行うのがカンファレンスです。いろんな意見が出るということは大事。主治医だけで管理するのはカンファレンスを行って管理するのでは予後が明らかに違うことが報告されています。素晴らしい医師でも専門が違うと見方が違いますから。今は、医師だけではなく、看護師、臨床工学技士、理学療法士、薬剤師、感染症の専門医、NST（栄養サポートチーム）の人などいろんな人の意見を集約し、治療方針を決めることが重要です。これを集学的治療と言います。ICU（集中治療室）で治療することが集学的治療ではなく、カンファレンスでみんなでディスカッションして初めて集学的治療と言えるのです。

有嶋 研修医の発言であっても、良い意見であれば取り入れるということですね。そういう雰囲気がないといけない。

垣花 声の大きな人、怖い先生がいると何も言えなくなってしまうというのが一番良くないと思います。みんなが物を言いやすい環境をつくるのも私の役目です。患者さんの状態は、データだけでは

わからない。その前に身体症状が出るんです。看護師さんは、いつもと違う、あれ？と思うことがある。その時、相談しやすい医師であることが大切です。看護師さんが遠慮するようなでは情報共有できないのです。

福元 担当の先生が休みで、患者さんの状態が変わってきているときにも似たような状況が起こります。心臓が止まってしまうと救命はかなり難しくなりますから、院内で心停止させないように体制を整えることが必要です。

垣花 実は病院内で病状が急変することもあります。心停止する前に早く介入して助けようということから始めたのがRRS*1です。

福元 鹿児島大学病院のRRSは昨年4月に始めました。ある一定の基準は設けていますが、状態の危なそうな患者さんを見つけた人は誰でも、救急外来の担当医師に連絡できるように体制を整えています。救急医師による診察で、状態が危ないと診断されたら主治医と連絡をとりながら治療に介入する。場合によっては、より集中的な治療を行うためにICUに移動する、などの処置をします。去年1年間で100件ほどの連絡があり、その中の何例かは、放置していたら危なかったかも、というケースがありました。

RRSの導入によって救急の外来担当の医師は業務が増えることになり、負担になっているとは思いますが。しかし、患者さんの命を守ることが優先です。RRSは、オーストラリアなどで大きな試験が進んでいて、良い結果も出ています。鹿児島大学病院でも看護師が意識を持って看ることと患者の異変にいち早く気づき、RRSへ連絡することで心停止を防ぐ、医療チームみんなで

患者さんを見守っていく。そういうシステムとなるようにしたいと思っています。

*1 RRS（ラビッドレスポンスシステム）…院内で心停止になる前に早期介入することで予後を改善するシステム

地域医療の精度を高める特定看護師養成

垣花 鹿児島大学病院では、現在、特定看護師の研修センター設置へ向けての取り組みを行っているところです。例えば、エコーというのは痛みなどの侵襲もないすごいスキルです。福元さんのようにしっかり勉強している特定看護師は、心エコーについても医師以上とも言える専門的知識を身につけています。福元さんは心エコーの評価もでき、医師とディスカッションすることができ、これは非常に大切なことです。医師とディスカッションできるメディカルスタッフを育てようということ、鹿児島大学病院では特定看護師養成への取り組みを始めました。

福元 2008年頃から看護師の業務拡大について厚生労働省で話し合いが行われていました。それが「特定行為に係る看護師の研修制度」となっており、2014年に「医療・介護一括法案」が可決されて、昨年の10月から施行されています。国は2025年までに10万人の養成を目標にしています。現在、鹿児島大学に研修センターを立ち上げる取り組みを行っているところで、申請が通ったから今年10月からスタートする予定です。

「特定行為に係る看護師の研修制度」は研修を修了しても新たな資格が得られるものではなく、手順書によって特定行為を実施することができ

るようになるというものです。特定行為とは、これまで医行為とよばれていた医師のみに許されていた行為が、業務拡大で看護師に許された行為です。38行為に分かれていて、21区分あります。鹿児島大学の研修センターでは呼吸と循環に特化した内容で始めたいと考えています。呼吸・循環の専門知識と技能を身につけると、重症の患者の対応や急変時の対応が可能になりますので、医師の数が少ない病院でも研修を修了した看護師が対応できるように考えています。

垣花 いま北海道で、特定看護師がタブレット型端末で患者さんを写して研修機関病院の医師に送り、医師の指示に従って患者さんを助けるという試験的取り組みが行われています。

福元 鹿児島でも、離島・へき地の医療の問題があつて、三島村などではテレビ電話のような手段はあります。離島・へき地の看護師が研修センターで知識や手技を磨いた上で大学から包括的指示を受けることができれば、もっと離島・へき地の医療が充実してくると思います。研修センターの受講生については、最初は鹿児島大学病院の看護師への教育を考えていますが、他の病院からも受け入れます。情報は鹿児島大学病院のホームページにも載せます。働いている看護師を対象としているので、カリキュラムの基本は臨床で使える内容です。eラーニングも組み込み、離島の方が研修を受ける場合でも仕事を休み期間をできるだけ短縮できるよう計画しています。

垣花 特定看護師の養成も屋根瓦方式があてはまると思います。学んだ看護師が地域の病院に戻ることで、病院全体のレベルが上がっていくことが期待できます。今までだったら大学病院に送ってい

た患者さんに対しても何か処置ができるかもしれないし、搬送するまでの安全を確保できるかもしれない。大学病院にフリーの看護師さんを数名置いて、研修に来られる看護師さんの代わりに派遣する体制をとっているところもあると聞いています。将来的にはそのようにできればと思います。

災害救援への積極的参画

垣花 救命センターの活動に関しては、今回、熊本の震災があつたのでDMAT^{※2}が出勤しました。72時間、急性期を支援するのがDMATです。その次にJMAT^{※3}、そして救護班が動きました。有嶋先生はDMATの第2班で行かれました。被災者の受け入れに関しては単発で数件ありましたが、件数は多くはありません。心臓の手術が必要な赤ちゃんが被災地から鹿児島大学病院ICUへ防災ヘリで搬送され、手術も成功して元気に退院したことはニュースにもなりました。

有嶋 熊本市民病院のNICU（新生児特定集中治療室）が使えなくなりましたからね。

垣花 今回の救援のトピックはJMATに歯科の先生が同行したことです。口腔内のケアが必要な患者さんがいるという情報をDMATのメンバーが持ち帰り、それを知った歯科の先生が進んで行かれました。口腔内の管理がうまくできていないと誤嚥性肺炎を起こしやすいのです。

有嶋 今回、断水でうがいや手洗いなどのセルフケアがきちんとできなかったのですね。

垣花 DMATは訓練を受けた人たち。JMATには内科、外科、いろんな診療科の先生が入ります。それとは別に深部静脈血栓症（エコノミー症



熊本の震災におけるDMATの活動の様子

候群)をケアするグループが作られて派遣されています。また、全国の精神科の先生で作られたDPAT^{※4}もあり、急性期から慢性期にかけての精神的サポートを行います。

福元 また、鹿児島県で院内感染対策に関する医師、メディカルスタッフからなるKICT（鹿児島ICT^{※5}ネットワーク）という組織があり、

今回、熊本へ行きました。災害時には感染症のコントロールは非常に重要だということです。

垣花 災害救援は、依頼がないと自費のボランティアになってしまいます。そうなると指揮命令系統から外れるので、逆に迷惑をかけてしまうこともあります。今回もDMATは厚労省からの依頼でしたが、その後は自分たちで依頼を探しました。JMATAは医師会からの依頼に応えた形でしたが、それも4月で終わってしまったので、また自分たちで電話をかけて探し、全国知事会からの依頼を見つけて行きました。

有嶋 阪神大震災の反省からDMATが作られて、JMATAができました。円滑な引き継ぎができないのは、歴史が浅いことも関係していると思います。ただ、大学病院は体力があるので職員を長期派遣することができます。救援に積極的に参画するのも大学の本来の使命の一つだろうと思います。

垣花 その取り組みはしています。東日本大震災の時も12チーム、延べ94人出しました。精神科のDPATはかなり長期間現地で活動しました。一過性の救援に終わることなく、2〜3カ月の長期的な支援を行うマンパワー、資源のある大学病院としての中長期的な支援体制にも取り組んでいます。

- ※2 DMAT (Disaster Medical Assistance Team): 災害急性期に活動できる機動性を持つトレーニングを受けた医療チーム
- ※3 JMATA (Japan Medical Assistance Team): 日本医師会が被災地に派遣する災害医療チーム
- ※4 DPAT (Disaster Psychiatric Assistance Team): 災害派遣精神医療チーム
- ※5 ICT (Infection Control Team): 感染対策チーム

鹿児島市立病院との連携

薬剤部長 武田 泰生 教授

ここ3〜4年、鹿児島市立病院、国立病院機構鹿児島医療センターと一緒に勉強会や研修会を開催し、いろんな職種の人たちと集まって意見交換しています。

これまで、医師については大学病院から市立病院に派遣するなどの交流がありました。医師以外の医療スタッフは交流がほとんどないという状況でした。消化器疾患・生活習慣病学分野(旧第2内科)教授であった坪内博仁名誉教授が、平成25年8月、市立病院院長に就任されたこともあり、互いの医療技術職員等の人材確保と育成、医療資質の向上に向けて連携への動きが加速し、昨年11月18日、連携に関する協定が結ばれました。今後は、それぞれの部署、職種間で独自に連携を実施していくことになっています。



平成27年11月18日、市立病院との連携に関する協定が結ばれた。

私たち薬剤部を例にとると、大学病院は日本病院薬剤師会や日本医療薬学会の専門薬剤師をはじめとすると、さまざまな専門・認定薬剤師の研修施設に指定されています。例えば日本病院薬剤師会のがん薬物療法認定薬剤師の資格をとるには3カ月連続した研修を認定施設で受ける必要がありますが、市立病院は人員も不足しており、これまで研修のための人員派遣は難しい状況でした。今回の協定によって人員の交換派遣

が可能になりましたので、市立病院の薬剤師が大学病院へ出向き、各種専門・認定薬剤師の研修を受けることも可能になったわけです。

病院の薬剤師の仕事というと、一般的には窓口での調剤や製剤というイメージですが、いま薬剤師がどんどん病棟に入っています。2012年度の診療報酬改定で病棟業務の薬剤業務実施加算が新設され、大学病院でも全病棟に薬剤師を配置する方向に動いてきました。患者さんの医療安全の向上と、医師の負担軽減という側面からも薬剤師がチーム医療の中に入る流れがあります。将来的には、医師が病棟を回診するときに薬剤師が同行し、薬の処方設計支援を行うところまで考えています。市立病院は、人数の関係でまだ病棟での業務は実施されていません。今後、病棟業務も始められると思いますので、そういった面でも連携を有効に活用していけたらと考えています。





動物・畜産業講座コーディネーター

共同獣医学部 **宮本 篤** 教授



前期の受講生は法文・工・理学部生です。卒業後、法文学部生が銀行に就職したら農家への投資を検討する機会もあるでしょう。理工学部生であれば農産物の加工や農機具製作に携わるかもしれません。鹿児島県の2014年農業総産出額は4263億円、その64%は畜産部門です。鹿児島の産業を盛り上げるためにも畜産部門を活性化することが大事です。そういった観点からも、あらゆる分野の学生に農業・畜産を知ってほしいです。

動物・畜産業講座コーディネーター

共同獣医学部 **藤田 志歩** 准教授



私自身は野生動物による農業被害について調査研究を行っています。調査地を訪れると、鳥獣被害の面から過疎化など地域の問題が見えてきます。授業を通じてそのような地域の現状について伝え、学生が自分で考え、気づくきっかけになればと思います。

「産業動物のアニマルウェルフェア」(共通教育科目)

● 共同獣医学部教授

高瀬 公三 先生

「地(知)の拠点」を標榜する本学の地域貢献活動の核を担うCOOセンターでは、教育の一環として平成28年度から全1年生を対象とした共通教育科目「大学と地域」を開講した。農林水産業、医療、まちづくり、観光、環境・島嶼など鹿児島に関連の深い10のクラスが設けられ、それぞれ専門分野の教職員数名がオムニバス形式で講義を担当する。学生は、学部を問わず希望に沿って選択、受講することができる。今回は「動物・畜産業」をテーマにした講義の1コマに潜入した。

命をいただいて生きている

「ベジタリアンの学生さんはいらっしゃいますか?」。開口一番、高瀬先生はそう切り出し、学生を見渡した。「産業動物のアニマルウェルフェア」とあまり聞きなれない言葉が冠された講義の内容が、実は身近な「食」に関係する内容であることが伝わってきた。「産業動物とは、動物性タンパク源として人間に命を捧げてくれる牛や豚、鶏などの家畜や家禽のことです」。アニマルウェルフェアを直訳

すると「動物福祉」となるが、人間目線で愛護するということは少し違う、と先生は続ける。「動物行動学も深く学び、動物の目線に立って考え、動物が心身ともに快適に生活できる方法を探っていくか」といけないう。難しいことですが……。鳥類の研究を専門とする獣医師でもある高瀬先生は、アニマルウェルフェアの概念を日本の養鶏現場に導入する活動にも熱心に取り組んでいる第一人者だ。

矛盾を知る

「人間は、自分の命がいつ尽きるのか、だれも知りませんよね。一方、産業動物は繁殖から飼育、出荷まで、その命を人間によってコントロールされている。肉用牛が2.5年、豚が6〜7カ月、フライドチキン用のニワトリは生まれて42日が過ぎると、命を犠牲にしてわれわれにタンパク質を提供してくれているのです」。本来、飛べる鳥であった鶏が人間によって選抜改良(悪)され、肥大したブロイラーは飛べなくなってしまう話、鶏が本来の生理に反して毎日卵を産まされている話、飼養の効率化のために尻

尾やくちばしを切断されている話など、現場を知る研究者から畜産の現状が伝えられる。自然な飼養スタイルを目指せば問題が解決する、という単純なことではないのだともいう。鶏を屋外で平飼いするには、広い敷地や資金が必要になり、肉や卵の価格高騰につながる。また、動物同士の勢力争いが起き、喧嘩による殺傷の原因にもなる。さらに、鳥インフルエンザなど防疫面での問題も発生する。

動物が快適に過ごせる状態で飼養し、同時に産業として成立させるといふことには、さまざまなジレンマや矛盾が含まれることが見えてくる。それは、味と安心安全、求めやすい価格を求める私たち消費者のエゴが作り出した課題でもある。「私がみなさんに言えるのは、唐揚げを注文したら全部食べてください、ということだけです」という高瀬先生の声が胸に響く。

「健康」から生まれる「安心安全」

アニマルウェルフェアに
取り組む意義は、単に愛

護の精神だけではなく、産業面でのプロセスも見逃せないと先生は語る。「快適な環境、快適な条件で暮らすということは、心身ともに満足しながら生活できるので、動物の健康につながる。動物が健康に育つことで、安全安心な畜産物を供給することができるのです」。畜舎や鶏舎を建て替える以前に、動物たちが命を全うするまでの間、できるだけ快適に暮らすことができるよう環境を整える配慮が大切なのだという。

講義を受講した法文学部1年生の安藤えみりさんは「ウェルフェアという言葉から動物愛護の話だと思っていました。愛護を考えると産業面ではマイナスになるかと思っていたんですけど、健康とということが生産性につながるのだから、(アニマルウェルフェアは)もっと普及したらいいなと思いました。深く考え出すと止まらなくなってしまうのですが、お肉を食べるときは感謝していただくように思います」と感慨深げに感想を語った。

Profile



高瀬 公三(たかせこうぞう) 教授

鹿児島大学農学部1975年卒業、農学修士・獣医学
鹿児島大学1977年、獣医学博士・獣医学 麻布大
学1988年
(一助)化学及血清療法研究所(熊本市)に23年間勤務
後、母校の鹿児島大学に。
[所属学会] 鶏病研究会、日本産業動物獣医学会、日
本獣医師会、日本獣医学会(評議員)
[専門分野] 動物微生物学、家禽疾病学
[研究テーマ] ①家禽疾病学 ②動物微生物学 ③アニ
マルウェルフェア ④渡り鳥ツルの保護



医学部保健学科作業療法学専攻

助教／作業療法士 池田 由里子(いけだ ゆりこ)

いちぎ串木野市出身。2004年3月鹿児島大学医学部保健学科作業療法学専攻卒業。病院勤務を経て2006年10月から現職。2015年から鹿児島大学大学院保健学研究科博士後期課程在籍

OB OG Interview

01

作業療法士としての第一歩がスタートした学生時代。

目的が見えない時期があっても、しばらく続けてみてください。

病

気やケガによる障害や不自由さを抱える人に対し、リハビリテーションや指導を行うのが作業療法士の仕事です。例えば体の麻痺や筋力低下などがある場合、食事やトイレなどについて他者のサポートが必要な場合もありますが、環境を整えたり、自

助具や福祉機器を利用して自分でできることが増えると、より生活が豊かになります。私は現在、学生への教育活動と民間病院での臨床に携わっています。それと同時に大学院博士後期課程に在籍し、高齢者が地域で生活するために介護職と連携して作業療法を展開する、ということテーマに研究を進めています。

大学時代は、あまり作業療法の魅力が分からず、弓道部の活動に熱心な時期もありました。しかし、病院で実習を行うようになると、必死にリハビリテーションを受ける患者さんと患者さんのために奮闘する作業療法士の姿から色々なことを教えられ、作業療法士の仕事のやりがいと奥

深さに目を開かれる思いがしました。また、部活やクラスの間とキャンプや旅行、飲み会と学生ならではの遊びも満喫しました。

今、学生さんを見ていると、あまり自分の思いを主張しない傾向があるように感じます。失敗した経験がないところからきているのかもしれませんが、ぜひ失敗を恐れずに何でもぶつかってみてほしいと思います。また、勉強に限らずアルバイトやサークルで目標が見つからなくても、すぐ辞めるのではなく続けてください。続けることで今まで知らなかったこと、見えなかったことがきつと見えてくるはずですから。

深さに目を開かれる思いがしました。また、部活やクラスの間とキャンプや旅行、飲み会と学生ならではの遊びも満喫しました。





防衛省陸上自衛隊 自衛隊福岡病院

1等陸尉 歯科医官 山下 浩司(やました こうじ)

鹿児島市出身。2008年3月鹿児島大学歯学部歯学科卒業。防衛省陸上自衛隊入隊。幹部初級過程教育訓練、衛生隊、春日井駐屯地医務室衛生科長等を経て昨年から現職。2013年から鹿児島大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野在籍

OB OG Interview

02



ライフワークになる学問と恩師に出会った学生時代。

自分次第で学びを深めることのできる環境がありました。

陸

上自衛隊の歯科医官を務めています。一般の歯科医とは違い、自衛官としての役割もあり、まさに二足のわらじを履いています。

大学の時代はテニス部に所属し、朝7時から朝練。授業を受けてまたテニス。夜は学費を捻出するために塾でのアルバイト、と忙しいながらも充実していました。そんな日々の中、於保教授から受けた予防歯科の講義はとて

も興味深く、予防歯科だけは熱心に勉強しました。自衛隊入隊後は教育訓練を受けた後、研修医として2年間の教育を受けました。衛生隊という部隊に勤務している時、東日本大震災が発生し、災害派遣で福島へ出向き、約50日間にわたって活動に従事しました。災害現場での自衛隊員は歯磨きも思うようにできません。激務やストレスから歯科治療のニーズも増えたため、貢献できたように思います。

震災を経て予防の大切さを痛感し、於保教授を頼り、

職務の傍ら鹿児島大学予防歯科学分野の社会人大学院に入学しました。教授は私の興味に沿った研究をサポートしてくださり、昨年は口腔衛生学会での発表も果たすことができました。最後の課題である論文作成に現在取り組んでいます。

鹿大は、自分の努力次第でも学ぶことのできる環境が整っており、良い恩師との出会いもありました。興味ある分野がまだ見つからない時は、本当は何がしたいのか、何度も自分と向き合ってください。そして、後は考えるだけでなく、素直に謙虚に行動してください。

職務の傍ら鹿児島大学予防歯科学分野の社会人大学院に入学しました。教授は私の興味に沿った研究をサポートしてくださり、昨年は口腔衛生学会での発表も果たすことができました。最後の課題である論文作成に現在取り組んでいます。



研究室から



SCHOLAR
INTERVIEW

西南暖地における次世代型酪農システムの構築を目指して

～ロボット搾乳に最適な飼料・飼養管理体制構築への取り組み～

酪農は給餌、搾乳、牛の体調管理と毎日休む暇のない重労働だ。畜産県・鹿児島においても高齢化、後継者不足により酪農従事者は10年前に比べ減少。環太平洋経済連携協定(TPP)発効に備え、さらなる国際競争力が求められる中、自動化による労働環境改善と生産性向上に期待が寄せられている。鹿児島などの暖地における自動化について産官学からなる共同研究プロジェクトを牽引するのが本学共同獣医学部獣医繁殖学分野の安藤貴朗先生だ。

牛が自発的に搾乳へ

研究の実証農場として、いち早く酪農自動化に踏み切った鹿児島市本名町の有村ファーマーズを安藤先生とともに訪ねた。自動搾乳牛舎で飼養されている乳牛は現在92頭。建屋内に搾乳ロボット2台が設置されており、牛はベッドから自発的に搾乳場を訪れている。なんと感心な牛たちかと眺めていると「おもしろいご飯がもらえるので、牛たちは自分から搾乳にやって来るとです」と安藤先生。牛舎ではPMRと呼ばれる混合飼料が与えられる一方、搾乳ロボットに入るとさらに嗜好性の高い濃厚飼料が与えられる仕組みになっている。牛の首に取り付けられたタグをロボットが読み取り、餌の量も個体に合わせて供給される。

一方通行の動線が設計されており、搾乳と給餌が終わると牛は再び自分のベッドへ帰っていく。搾乳から一定の時間を経ていない牛はロボットに仕分けられ、ゲートが開かない

ようになっていく。

人の手による搾乳には多大な時間と労働力を要するため、一般的な乳搾りは朝夕2回に限られる。一方、ロボットは24時間体制での搾乳を実現。牛は自分のペースで搾乳機に入ることができるともな睡眠中に起こされることもなくストレスを軽減できる効果もあるという。この牛舎でロボット搾乳が始まっておよそ1年半が経過し、1頭あたりの搾乳回数は1日平均2.7回に増え、乳量は全体でおよそ10%アップしたという。

生涯生産性と乳量向上へ向けて

農場では、搾乳機のほか生乳分析モニター装置、自動給餌機、飼料調整機など機械を導入。つきつきりでなくとも生乳成分や歩数などの情報から健康状態や発情時期をより早く把握することが可能になった。また、自動糞尿排出機や暑い時期に自動稼働するスプリンクラーも完備され、牛の健康維持とストレス緩和



Scholar Interview

安藤 貴朗 准教授

農水産獣医学域獣医学系
共同獣医学部獣医学科
臨床獣医学講座獣医繁殖学分野

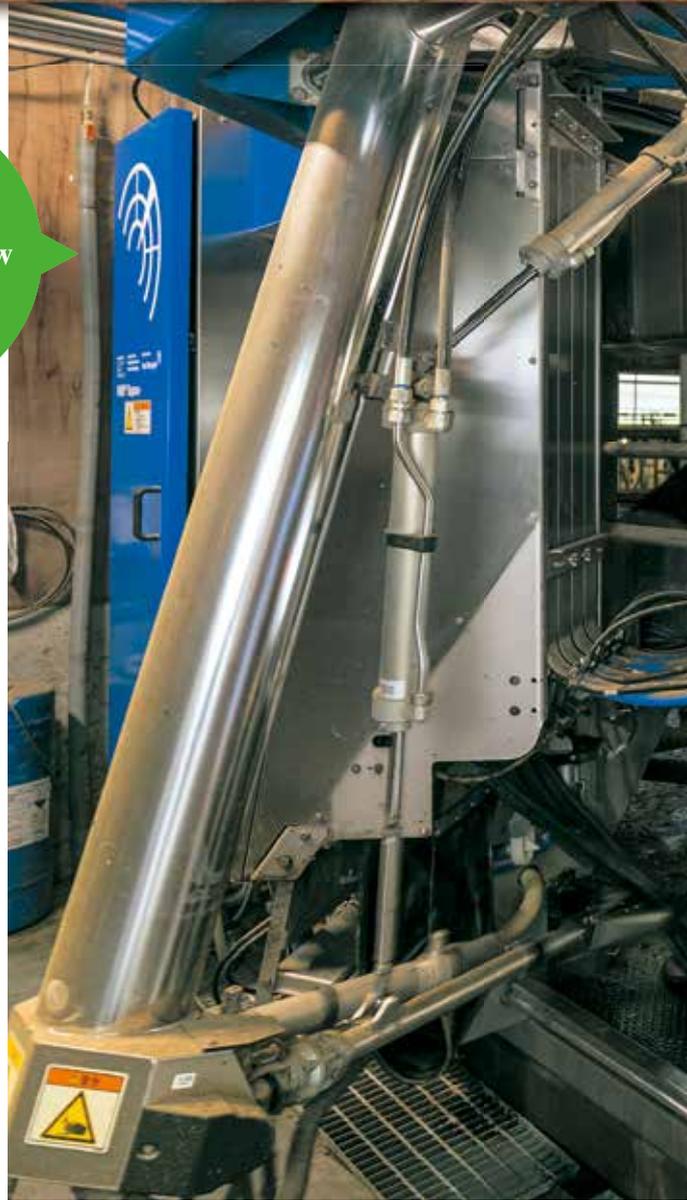
Profile 安藤 貴朗(あんどう・たかあき)

2001年3月鹿児島大学農学部獣医学科卒業。
2005年3月山口大学大学院連合獣医学研究科修了。博士(獣医学)。

■所属学会:大動物臨床研究会、家畜感染症学会、日本獣医学会、日本獣医師会

■専門分野:産業動物臨床獣医学、獣医繁殖学

■研究テーマ:○獣医繁殖 ○内分泌 ○免疫 ○牛群管理



にも細心の注意が払われている。「病気を予防すれば子どもを産む回数が増え、牛乳の量も多くなります」と安藤先生。生涯年齢と生涯生産性を上げることが目標だという。

暖地ならではの課題もある。昨年1年間のデータを見ると、8〜9月の極暑期は乳量が落ち込み、5〜6月の梅雨時期には生乳中の乳脂率が下がることが見てとれる。

「環境を整え牛の不快感を軽減することに加え、さらに嗜好性が高く良質な餌の開発が求められています。タンパク質の量を調整し、食べやすい味やサイズへ改良するなどいろいろな方向から検証していく計画です」。設備の導入、検証を終え、今年度からは自動化に最適な餌の改良へと研究が進んでいる。

3Kからの脱却

自動化以前、有村ファーマーズでは家族4人で酪農に従事していたが、現在従事するのは兄弟2人が中心。朝夕の飼

料調整と監視以外、無人での運用が可能になったという。

7年前、会社勤めから実家の酪農業に転身した同農場の有村洋平さんは「夕方明るいうちに風呂に入れる日が来る」とは夢にも思いませんでした」と笑顔で話す。365日、早朝から夜遅くまで休みなく働くのが酪農家の宿命と聞いていたそうだが、ロボットを導入してから生活が一変したという。「牛の世話に追われていた頃は周りがよく見えていなかった。時間に余裕ができた今は牛の様子もよく観察することができ、仕事の全体像を見渡せています。3K(キツイ、汚い、危険)の最たる仕事だから若い人に人気がないのは当たり前と思っていましたが、自動化のお陰で大きく変わると思えます」と期待を語る。「酪農家さんの仕事は本当に大変です。過重労働を少しでも軽減して牛乳の質を良くし、経済的にも潤ってほしいです」。牛と人に向ける安藤先生の優しい眼差しの奥に研究者魂が燃える。

研究室から



SCHOLAR
INTERVIEW



地魚を食べて、地元の海を守ろう！

～水産資源の生態学的特性の研究成果を魚食普及活動に生かす～

ボウズコンニャクをご存じだろうか…。その正体は、コンニャクの仲間ではなく深海魚の一種。地味な外見ながら食べると4つ星クラスの美味だという。ほかにもコバンザメ、マルヒウチダイ、チョウチョウウオなど、鮮魚売り場では見かけないけれど味の良い魚が鹿児島県の海にはたくさん生息している。私たち消費者が地魚をよく知り、もっと食べるようになれば、豊富な地魚が店頭で並ぶようになり、地元の海と漁業に活力が蘇る。そんな水産事情について熱く語る、鹿児島県産の「地魚応援団長」、大富先生の活動を紹介します。

消費者不在の鹿児島

大学院時代、東京湾でシャコの研究をしていた大富先生は、本学に赴任し錦江湾（鹿児島湾）、八代海などで調査を開始。東京と鹿児島の大きな相違に気づいたという。「東京という一大消費地を背後に抱え、江戸前ブランドが確立されている東京湾産の魚は喜んで食べる人がたくさんいます。一方、鹿児島は、錦江湾という好漁場を目の前にしながら魚を食べる人がいませんでした」。調査の結果、鹿児島の人々は魚より肉を好むこと、そして、アジ、サバ、イワシなど知っている魚は食べるが、知らない魚は食べない、ということも分かった。

「水産業界は安い手市場。消費者が買ってくれないと漁業者は水揚げすることができないのです」。おいしい魚はたくさん獲れるのに、販路がないために自家消費や海上投棄せざるを得ない地元水産業の現状を知り、販路拡大の必要性を感じた。「阪神

乱獲される漁業者

ファンは売れ残ったサインポールでも買いますが、巨人ファンは人気選手のものであっても阪神グッズは買いません。大事なのは阪神ファンを増やすことなんです」と、関西出身の大富先生は、魚好きを阪神ファン、肉好きを巨人ファンにたとえて解説する。

大富先生の主な研究対象はナミクダヒゲエビをはじめとする深海のエビ。資源として管理するための基礎的知見を得ることを目的に、成熟・産卵や成長のメカニズムなど生態学的特性の調査・研究を行っている。毎月1回は学生とともに水産学部の練習船「南星丸」で錦江湾に赴き、試験底曳網による定点調査を実施する。一般的に深海生物はフィールドが遠く、研究しづらいものですが、錦江湾は内海でありながら深海を有するどんぶかっの海。港から10分でフィールドに到着することができます。



魚食普及活動の一環として出版した書籍



MBCラジオ「とどろび」の収録



Scholar Interview

大富 潤 教授

農水産獣医学域水産学系
水産学部水産学科 水産資源科学分野



Profile 大富 潤(おとみ・じゅん)

東京大学大学院農学系研究科水産学専攻1991年3月修了・農学博士。

■所属学会:日本水産学会、日本甲殻類学会、日本水産増殖学会、水産海洋学会、日本調理科学会、日本沿岸域学会、The Crustacean Society

■専門分野:水産資源生物学、甲殻類学、水産資源管理学

■研究テーマ:○エビ・カニ類および魚類の資源生態学的研究 ○未利用・低利用水産資源の有効利用に関する研究 ○干潟における底生生物の分布に関する研究

想的な環境があります」

調査・研究のため漁船に同乗する機会も多く、地元漁業の推移を目の当たりにしてきた。「四半世紀前は100隻を超える」とこの網(小型底曳網)漁船が錦江湾で操業していましたが、今や40隻程度。資源保護は大事ですが、乱獲されているのは魚よりもむしろ漁業者という感があります」。数少ない漁業者の操業環境を守るためにも、魚食普及による販路拡充を図る必要がある」と大富先生は語る。「魚は養殖したらいい、という声もあります。天然資源の生産の場として機能しなくなると、海は死んでしまします。なにより、旬の魚で四季を感じる食文化を大切にしたいじゃないですか」

魚食文化を次世代まで

魚食普及のため、大富先生は一般消費者向けに食べ方、食味などまで網羅した地魚図鑑などの書籍を執筆

刊行するほか新聞連載、ラジオ番組出演、講演、イベント企画などを惜しまず多角的な啓発活動が続いている。魚食普及活動が実を結んだ例としてヒメアマエビの話聞いた。海上投棄されていた小エビに、篤姫にあやかた名をつけて市場に売り出したところ関東で人気を博し、1キロ2000円という高価格商材に成長した。「あまり価格が高騰すると手軽に入手しづらくなるという弊害も出てきますが」。販路拡大戦略の大切さを物語るエピソードだ。

「生き物自体の研究も大事ですが、研究成果を社会に還元できなければ意味がない。研究を重ねるうちに、海を愛する同志である漁業者たちのために何かしたい、という気持ちになったんです」。魚食普及を一過性のブームに終わらせることなく、次世代に続く魚食文化を学生とともに育みたいという。先生には、海の声が聞こえているのかもしれない。



全学必修科目「大学と地域」スタート

9学部を有する総合大学である鹿児島大学では、2014年度に文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC)」の採択を受け、地域課題の解決や地域貢献意欲を持つ人材の育成に取り組んでいますが、その一環として地域に学ぶ科目として、2016年度から「大学と地域」を開講し、4月12日に、第1回目の講義として、動画による前田芳實学長の講話が行われました。

これは、1年生全員(約2,000人)が共通教育における必修科目として、鹿児島に関する10分野*の中から所属学部にとらわれることなく一つを選択し受講するものです。

本科目は、(1)大学での学修に必要な論理的思考力や課題発見・解決の能力を醸成、(2)地域の現状・課題等を学ぶことで地域志向マインド(地域貢献の意欲)を持った人材を育成、(3)地域志向マインドの醸成に必要な地域の特性、優位性、発展可能性の理解を促進、(4)上記(1)~(3)を通して地元への就職意欲の増進を目的としています。

また、鹿児島の事情をより理解するため、大学教員だけでなくCOC事業の連携自治体(鹿児島県・鹿児島市・薩摩川内市・与論町)の職員も各分野から講師として参加することとなっています。

鹿児島大学では、これまでも地域とともに社会の発展に貢献する大学として、鹿児島の文化や自然、あるいは産業などについて学ぶ地域志向科目を開講していますが、新たにスタートする「大学と地域」は、全学必修科目(すべての学部生にとって卒業要件)、鹿児島に関する10分野という幅広い分野の現状や地域課題などについて、全学の教員及びCOC事業の連携自治体の職員等が授業に参画し学ぶ中で、自ら主体的かつ論理的に考える力を備え、地域貢献意欲を持った人材を育成する点が異なります。今後、従来の地域志向科目を再編し、「大学と地域」を基盤とする「かごしま地域教育プログラム」を構築し、地域貢献意欲と地域で活躍する能力を備えた人材の育成を目指します。



第1回授業 学長講話の様子

※10分野

- ①防災 ②医療 ③まちづくり・観光 ④エネルギー
- ⑤農業 ⑥森林・林業 ⑦動物・畜産業 ⑧水産業
- ⑨環境・鳥獣 ⑩まちおこし・教育

鹿児島商工会議所との包括連携協定を締結

鹿児島大学は、4月7日、鹿児島商工会議所との包括連携協定を締結しました。併せて、鹿児島商工会議所と鹿児島国際大学の包括連携協定も締結しました。

本学からは、前田芳實学長、住吉文夫理事・副学長(研究担当)、清原貞夫理事・副学長(教育担当)が出席し、鹿児島商工会議所からは、岩崎芳太郎会頭、鹿児島国際大学からは、津曲貞利学長をはじめとする関係者らが出席し、協定内容の「地域産業界が求める人材の育成」、「学卒者の地元就職率向上と持続的定着」等が確認された後、協定書に署名が行われました。

鹿児島商工会議所の岩崎会頭から、人口減少、人材流出、中央との格差などの問題を抱える地方が存続していくためには、産学の協働は地方の継続性を維持するためにも必要であり、そのなかで、鹿児島大学、鹿児島国際大学等の教育機関が主体性を持って地元経済界と協働していくことに大きな期待を寄せていることが述べられました。

前田学長からは、今後とも積極的なパートナーシップを築き、地方創生の取り組みを加速させて地域活性化に貢献したい旨が述べられました。



左から前田学長、岩崎会頭、津曲学長



オール鹿児島による学卒者地元定着促進事業の キックオフシンポジウムを開催

～文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に係る「食と観光で世界を魅了する『かごしま』の地元定着促進プログラム」～

鹿児島大学では、3月7日、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に係る「食と観光で世界を魅了する『かごしま』の地元定着促進プログラム」キックオフシンポジウムを鹿児島市内のホテルで開催しました。

鹿児島県内の大学・短大・高専8校と鹿児島県、金融機関及び企業等団体計24の事業協働機関が連携協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育プログラムやその他就職支援の取組をオール鹿児島で推進し、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目指す本COC+事業のキックオフを記念するシンポジウムに、事業協働機関関係者や県外大学関係者等約170人が参加しました。

シンポジウムでは、前田芳實学長(学卒者地元定着促進協議会議長)、伊藤祐一郎鹿児島県知事(代読)の挨拶に続いて、来賓の文部科学省高等教育局大学振興課の永田昭浩課長補佐が祝辞を述べられました。

引き続き、住吉文夫理事・副学長(研究担当)による本COC+事業概要説明後、「地方社会で必要とされる大学とは」と題して、リクルート進学総研所長・リクルートカレッジマネジメント編集長の小林浩氏による特別講演が行われました。小林氏は、人口減少社会の中で、地方創生のために大学等が担う役割として人材育成という側面から、地域社会に必要とされる大学等のあり方について、文部科学省の政策や他の地方大学の取組事例等を交えながら指摘されました。

第2部では、「地方創生と高等教育機関の役割」のテーマで小林氏をモデレーターとして、清原貞夫理事・副学長(教育担当)、大久保幸夫鹿児島国際大学副学長、楠原良人鹿児島工業高等専門学校地域共同テクノセンター副センター長、中堂菌哲郎鹿児島県企画部次長、津曲貞利鹿児島商工会議所副会頭、片平金也鹿児島県農業協同組合中央会専務理事、白橋大信(公社)鹿児島県観光連盟専務理事がパネリストとして登壇してパネルディスカッションが行われました。各パネリストが大学・高専、地方公共団体、産業界の立場から、地方創生に向けた役割、COC+事業に対する期待や課題等について活発に意見を交わしました。最後に小林氏が「鹿児島の自然、歴史、文化、産業といった特性を活かし、COC+事業の仕組みを実質的に機能させるために事業協働機関の力を結集していただきたい」とエールを送る形でパネルディスカッションを締めくくりました。

終わりに、本COC+事業推進責任者の福島誠治本学産学官連携推進センター長が閉会の挨拶を述べました。



卒業生と在学生との交流ワークショップを開催

～鹿児島で働く先輩との交流で地元企業等への理解を深める～

5月21日、卒業生と在学生との交流ワークショップが鹿児島大学学習交流プラザで開催されました。本ワークショップは、地元企業に就職した卒業生から、就業後に求められる(必要とされる)能力や資質、在学中に学修すべきことや大学生生活の過ごし方などについて生きた情報を在学生在が得ることにより、就職活動に向けた有効な対策のヒントに気付く機会とするとともに、今後の大学教育や就職支援の充実に資することを目的として企画されたもので、地元企業等に就職している卒業生8人と鹿児島大学をはじめとする県内大学から17人の学生が参加しました。

はじめに、産学官連携推進センターCOC+推進部門長の井上佳朗特任教授による開会の挨拶の後、卒業生の自己紹介に続いて、卒業生2人からこれまでの経験を踏まえたメッセージが在在学生へ送られました。

その後、今後の教育や就職支援のあり方などについてグループワークが行われ、COC+教育プログラム関係教員をファシリテーターとして、卒業生と在学生在がそれぞれの立場からディスカッションを展開。終わりに各グループから人間力やコミュニケーション能力を磨くための授業科目などについて提案がありました。

なお、本ワークショップは、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の一環として開催されたものです。



グループワークの様子

産業動物総合臨床実習実施に関わる産学間(企業・大学)協定を締結

鹿児島大学共同獣医学部では、国際水準の獣医学教育を実施するため、民間農場等と連携して産業動物(牛・豚・鶏)に関する臨床実習の実施を目的として、以下の6企業7団体*と産業動物総合臨床実習実施に関わる産学間(企業・大学)協定を5月26日に締結しました。

従来は、附属動物病院における犬猫の臨床実習が中心となっていました。産業動物分野で働く獣医師養成のため、優れた専属の管理獣医師がいる企業の農場へ学生を派遣し、産業動物の現場を活用する参加型「臨床実習」を実践します。

学生は、農場の飼育環境、飼養管理(給餌、給水、投薬など)、健康管理(体温、体重測定、採血)、臨床症状の観察、触診、死亡個体の解剖観察など、実体験から学ぶことができます。

調印式では、高瀬公三共同獣医学部教授が事業の概要について、「わが国随一の産業動物生産基地という鹿児島の地域特性を生かした今回の試みが、全国の獣医系大学における産業動物臨床実習の一つの“モデルケース”になるのではないかと説明し、その後、宮本篤共同獣医学部長および各企業の代表者が協定書への署名を行いました。

続いて、それぞれの企業の代表者から、「地域の活性化にとって、鹿児島における産業獣医師の確保と若者定着に向けての課題は非常に重要であり、この協定により現場を認識してもらい、技術の向上と知識を習得してもらいたい」などの挨拶がありました。

最後に宮本学部長が、「今回の調印により、学生が最も恵まれた環境の中で学ぶことができ、獣医師養成の場を与えていただき感謝している」と挨拶を述べました。

*鹿児島県農業共済組合連合会、(株)ナンチクファーム、(株)ジャパンファーム養豚事業本部、同チキン生産本部、鹿児島県経済農業協同組合連合会、鹿児島くみあいチキンフーズ(株)、(株)ウェルファムフーズ



熊本地震義援金を贈呈しました

鹿児島大学では、学内に熊本地震義援金の募集を周知し、4月18日から4月28日の期間に、教職員、学生から集められた義援金5,379,842円を、日本赤十字社鹿児島県支部を通じて被災地に送り、5月19日、前田芳實学長が義援金目録を日本赤十字社鹿児島県支部長の伊藤祐一郎知事に贈呈しました。贈呈にあたって、前田学長から「学生からの義援金の中には、大学構内や鹿児島市内の商業施設等で募金活動を行ったものも含まれております。少しでも被災者のお役に立てていただければ」と挨拶がありました。引き続き行われた懇談では、附属病院のスタッフを医療支援に派遣していることや、今後も義援金を募集するなど、鹿児島大学として微力ながら支援を続けることを表明しました。

鹿大「進取の精神」支援基金へのご寄附のお願い

鹿児島大学は、地域活性化の中核的拠点として、学生のグローバル教育の推進や地域に貢献する人材の育成など教育研究支援の強化に取り組むため、鹿大「進取の精神」支援基金を創設し、寄附のご協力をお願いしております。

つきましては、本基金の趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。なお、本学への寄附につきましては、所得税法、法人税法上の優遇措置の対象となります。

お問い合わせ先

鹿児島大学学長戦略室 TEL:099-285-3101 FAX:099-285-7034

E-mail: s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp

基金ホームページ: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/>





進め！ 鹿大生！ STUDENT INTERVIEW

NPO法人ドットジェイピー インターンシップ事業部
鹿児島支部代表

伊達涼太さん

(法文学部経済情報学科4年生)



政治は難しいものではなく「生きる当たり前」を作り出しているもの ～若年投票率アップ目指し、議員インターンシップ運営に携わる～

「若者と政治を結ぶ」というキャッチフレーズを掲げて活動するNPO法人ドットジェイピー鹿児島支部が2016年4月発足。学生が政治を体験する「議員インターンシップ」の運営を活動の柱とし、若年投票率の向上を目指しています。代表を務める伊達涼太さんが、活動に参画したきっかけは、2年前に体験した議員インターンシップ。とくに政治に興味があったわけではなく、社交性を身につけたいという軽い気持ちで参加したそうですが、実際に議員と行動を共にする中で政治に対する見方が変わったと言います。「政治は、いま僕たちが生きている、当たり前を作り出すもの。若者が生きやすい社会をつくるには、若い世代が投票することです。1票の重みを知ってほしい」と語ります。「と言っても政治家を目指しているわけではありませんが」と笑顔を見せながらも、18歳選挙権が実現して初めての参院選を前に、高校生に向けた啓発活動に奔走中です。

座右の銘

「百折不撓」

基本的に政治に興味がある学生は多くありません。話を聞いてもらえない、チラシを配ってもすぐに捨てられるなど、心が折れそうになることや落ち込むこともたくさんあります。それでも、やると決めたからには何回でも立ち上がろうと。その思いを表すこの言葉を座右の銘にしています。



さっつんが行く!

SATTUN's Campus Sketches

鹿大キャンパス漫遊記



鹿児島大学公式マスコットキャラクター

さっつん

“

Vol.04

鹿児島大学総合研究博物館 常設展示室

本学における諸分野の研究活動を通じて集められた学術資料を収集・整理・保管し、教育・研究に活用する目的で2001年、総合研究博物館が設置されました。これらの学術資料を一般公開する場として開設されたのが鹿大正門脇に立つ常設展示室です。

1928(昭和3)年に築造された鹿児島高等農林学校の図書館書庫を改装した建物はレトロな趣で、国の有形文化財に登録されています。1階には本学キャンパスから発掘された考古学資料と第七高等学校、高等農林学校時代の教育研究資料。2階には鹿児島の地質学資料と古代海生生物の化石などが展示されています。どなたでも自由に見学できますので、散策がてらにお越しください。

開館：火～土曜 午前10:00～午後5:00
(入館無料。年末年始・祝日は休館)



📷 今号の表紙「鹿児島大学病院ヘリポート」

2014年1月、新病棟(C棟)屋上ヘリポートの運用を開始しました。ドクターヘリの受け入れ及び遠隔地医療支援態勢が整備されたことで、救命救急の機能強化と患者搬送時間の短縮に大きな成果を上げています。通常は機体重量7.0tまでのヘリの離発着が可能で、東日本大震災クラスの大震災発生時は特例的に約10.0tの自衛隊救難ヘリまで離発着可能となる整備がなされています。

2015年度の救急ヘリ受付件数は38件。県内のほか宮崎、熊本、長崎からも受け入れています。今年4月に発生した熊本地震時には心臓疾患の子どもが搬送されました。桜島と錦江湾、遙かには開聞岳、高隈山、霧島連山など壮大な自然景観を一望する鹿児島大学病院救命救急医療の空の玄関口です。

